英語に堪能な小学校教師の英語音声指導観の変容過程①

—若手から中堅への移行期における「他者からの学び」に関する省察に焦点をあてて—

和田あずさ・ナットチー直子

1．問題の所在と研究の目的

秋田（1997, p.122）は教師の成長を「発達」と表し、それは単純な過程ではなく、戸惑い、つまずき、停滞などを自覚し省察しながら「教えるという意味を分かり直し、掘り下げながら熟練への道を歩む」ものであると述べる。また鈴木・庄司（2022）は教師の成長を「教師が自身の考え方を相対化し、新たな認知的枠組みを獲得して変容していく過程」と定義している。Burri（2021）が日本人高校英語教師１名を事例として行った研究でも、この教師の音声指導に関する 5 年間の成長の過程は多面的で非直線的であることが示されており、これらの論を裏付けているといえる。そこで本研究では、音声指導に関する実際の授業とその中で行われる教師の意思決定、実践に対する省察を研究の主題とする。そして、「英語が得意」ではあるが、音声指導について「発音の多様性の受容」と「英語らしい音声の学び」の間で葛藤を感じてきた教師（和田・ナットチー, 2025）を事例とし、この教師（授業者）が若手から中堅に移行していく過程の中で、これまでにみられた教師の信念や実際の音声指導が「他者の視点」を媒介としていかに変容していくかについて詳らかにすることを目的とする。なお授業者の小学校教師としての指導経験は、2024 年度時点で 6 年目である。一般に教員研修は、初任者、5 年経験者、10 年経験者、20 年経験者で区別されるほか、教職経験が 10 年目から 20 年目の段階で中堅教員研修や中堅教諭等資質向上研修などもある。そのため、本研究では 5 年目から 10 年目を「若手から中堅への移行期」とする。

2．研究方法

授業者は授業日の当日、あるいはできるだけ日を空けずに、授業内容と授業内の教師や児童の発音について気付いたことや考えたことを授業ノートに書き留めた。また、観察者が参加しない授業を可能な範囲で撮影し、振り返りの際に参照した。一方観察者は、2024 年 10 月 31 日から 2025 年 3 月 14 日まで、授業者が担当する第 3，4 学年の外国語活動及び第 5，6 学年の外国語科授業を継続的に観察し、ビデオでの録画、レコーダーでの録音、フィールドノーツの作成を行った。さらに、観察者と授業者は、計 4 回、授業に関する協同的な省察を行った。

データの分析について、授業者は自らが作成した授業ノートから、音声に関わる内容を抽出してカテゴリー化した。また、観察者は省察の逐語録を作成し、和田・ナットチー（2025）から導かれた「発音の多様性」「発音の明瞭性」と、このテーマに関わる「他者からの学び」に関する授業者の省察に着目して、暫定的な解釈を行った。

3．授業ノートの分析

資料の表は、ALT（A 先生）の発音が気になったとして、授業者が授業ノートに記録していた語句とその数、同カテゴリーに属する前年度の語句数を整理したものである。前年度は語強勢の位置に関するものが多かったが、今年度は個別の音素の発音に関するものが多かったことが明らかになった。この要因の一つは、2024 年度は前年度の研究の取り組みをふまえて、4 月からより詳細な記録を行っていたことと、「音素」のカテゴリーには ALT の母語の影響を受けた特定の子音や母音の発音が複数の語句の中に含まれることによると考えられる。また、これらの語のうちのいくつかは、授業者とともに 2024 年度に外国語専科を担当したもう一人の教師（B 先生）からも、授業者や観察者に対して度々指摘されていた。

音素	Indonesia, J (phonics), jump, South Asia, Vietnam, Egypt, Malaysia, spell, New Zealand, jelly, tomato, Tuesday – Thursday, thing, owl, speak, zoo, practiced, jaguar, zebra, orangutan, bear, lunch, Eiffel tower, zombie, curry and rice, juice, Nicole (name), thousand, church, zookeeper	31（3）
強勢位置	India, Korea, Canada, Mexico, Italy, spaghetti, September, October, December, social studies, integrated studies, scientist, programmer, giraffe, cucumber, caterpillar, orangutan, museum, desert, hospital, calendar, (The Statue of) Liberty, Peru, interesting, mountain, library	26（12）
強音節の母音長	Australia, thirteen – thirty, fourteen – forty, twenty, October, Tuesday, Team	7（3）
音声変化	want to, went to, can not, for one block, flight attendant	5（1）

4．授業者の省察の解釈

（1）2024 年 12 月 1 日の省察

以下の省察は、観察者と授業者が 2024 年度に行われた初回の振り返りの語りを抽出したものである。

［省察 1］

B 先生は私の立場というか、日本人英語教師としての立場で入ってくださっているので、そういう目では見ていないというか、多様な English の中に私は潜在的には含めてなかったんですよね、最初。ただ、授業をしていくうえで、「あ、B 先生の English も多様な Englishes の一つなんだ」って気づいた今です。（中略）日本人の英語の先生としてのお仕事としてそこ（発音）は別というか、ネイティブの先生が話すのを子供たちが聞くのが一番、っていう（思っていらっしゃるように見える）。（中略）ALT の先生のだけじゃなくって日本人の英語教師の発音も子供たちは聞いているので、やっぱりそこは大事かなって私は思ってます。

［省察 1］では、B 先生がティーム・ティーチング（TT）に加わり、授業ノートの記述内容の視点がどのように変化したか、また B 先生の発音に対する姿勢や授業者を含む日本人英語教師の発音のあり方をどのように認識しているかが語られている。和田・ナットチー（2025）までの省察で話題に上ったのは主に、授業者と A 先生や中学校の ALT（C 先生）の発音の違いだった。そして年度初めの段階で、B 先生は授業者を自らと同じ位置付けとみなされ、その発音は授業者が意識を向ける対象ではなかった。しかし、B 先生と TT を行っていく中で、音声指導に関わる日本人教師の役割や発音のあり方に関する B 先生と授業者の考え方の違いを感じ、授業者は「多様な英語」の枠組みを変化次第に変化させ、「日本人教師の英語の多様性」を明確に認識するようになっている。

（2）2025 年 1 月 28 日の省察

2 回目の振り返りの段階では、教室内の発音の多様性をより客観的に受け止めることができるようになっていることが、［省察 2］の語りに表れている。

［省察 2］

基本的に B 先生と A 先生が前に立たれるんですが、やっぱり私は A 先生と（ティーム・ティーチングを行って）もう 5 年目になるので、（母語の影響が表れる発音を）予測できるようになってきたなっていうのと、B 先生がその点で苦労されているなっていうのも目に見えるようになってきたというか。今までは A 先生が発音している音を聞いて、自分が発音してる音を聞いて、いろいろ考えることがあったのが、二人が（ティーム・ティーチングを）されているのを聞いて、「あ、こういう違いがあるな」っていうのを客観的に見れている。興味深いなと思って見させてもらっています。（中略）今まで「この音を A 先生はこう発音されていた」とか「それを聞いて自分はこう発音していた」とか、（今は）語れなくなってしまった。語れなくなってしまったというか、焦点ではなくなってきた感じがします。強調気味に子供たちと一緒にリピートする時に、「気を付けて言っています」って（これまでの省察で）言っていたようなところが、あまり「強調して言わなきゃな」って構えなくなったというか。

（3）2025 年 2 月 4 日の省察

3 回目の振り返りで授業者は、3 年生の児童がゼロは英語で何と言うのかとつぶやいた際、B 先生が「ゼロはゼロです」と答えたことに触れ、自らと B 先生との音声指導観の違いを［省察 3］で指摘している。

［省察 3］

（発音は）今回のポイントではなかったので、あまり時間をかけずさらっと流されたかったのかなって思ったんですけど、私は割と opportunity taker というか、（中略）そこは子供が興味を持ってるってことだから、レッスンに関係なくても指導をしたいと思ってしまうので、それがほんとにいいのかどうかは分からないですけど、違うなって思いました。今のままだったら子供たちは「ゼロは日本語の発音と一緒なんだ」って思ってる可能性が高いので、（中略）「日本語のゼロとは違うんだ」っていう感覚が身についた機会だったのかなって思います。

授業者はこのエピソードの時、自分なら「A 先生に聞いてみましょう」と全体に向かって声をかけ、A 先生と自分の発音を聞かせるだろうと考えていたとのことである。そこで観察者は「難しいですよね。（音声指導の）入り

としてゼロもゼロでいいよ、といくのか」と、B 先生の言葉について授業者とは異なる解釈を提示した。それに対する回答が［省察 3］である。つまりこの語りには、授業者が音声指導の導入として日本語との似ていることを取り上げるのではなく、日本語と似ていても異なることを重視して指導したいという信念が表出している。

（4）2025 年 3 月 13 日の省察

2024 年度、校内研究の一環として教師同士がお互いの授業を見合う取り組みに、授業者も加わるようになった。［省察 4］はその取り組みで得られた、1，2 年生の英語活動担当の C 先生と 6 年生の学級担任の D 先生からのフィードバックと授業者の受けとめを語ったものである。

［省察 4］

> （C 先生は）ご自身も英語がすごく堪能な先生なので、すごく発音をすごく気にしながら（授業を）見てくださってて、（中略）「私も（A 先生の発音が違う時に）どうしようか悩んでいるんですけど、先生はさらっと流してて、でもちゃんと A 先生とは違う発音をされているのを聞いて、あ、それでいいんだなって思いました」って（授業ノートに）書き留めてたんですね。（中略）実際に見てくださってそれでいいんだなと思ってくださったんだな、それが正解かどうかは分からないんですけど、やっぱり World Englishes として子供たちに聞かしたり学ばすべき、っていうことを暗に意味していたのかなって私は受け取って。（中略）ただそのあとにもう一言、「Educational English, Teaching English はどうあるべきかって、難しい問題ですよね」っておっしゃってて。（中略）どうあるべきかって（中略）子供たちに英語を教える先生としては、ずっと向き合っていく問題なのかなって。（中略）そのあと、D 先生に振り返りをいただいた時に、「いろんな先生の英語を聞かせているのもいいな」って記載があったんですね。割と D 先生も英語堪能じゃないですか、で、長年ずっと先生されてていろんな先生と関わっていらしてる先生からの言葉だったので、それはすごく大きいなって思って。（中略）ポジティブに捉えてくださっているんだなっていうのが一番強く思ったことで、（中略）うん、ほっとしたというか、ありがたいフィードバックだなって思って。

［省察 4］では、より経験豊富な教師に、教室英語の多様性を認めることや、そのために ALT と授業者の両方の発音を尊重しようと奮闘してきた自らの実践を肯定的に評価されたことへの安堵がみられる。その一方で、多様性を認めることとどのような発音であっても無条件に許容することは異なること、児童に示す発音はどうあるべきかということは、英語教師である限り向き合い続けるべき問いであると捉えるようになっている。

5. 総合考察

授業者自身が「正確である」と考える発音を ALT の前で示すことに、葛藤や感情の起伏が起こらなくなっていることから、それが「自然」な状態になっている。このことから、同僚性を意識することによる抵抗感は軽減または解消されていると考えられる。また、ALT 以外の様々な教師との関わりから、「英語と日本語との違い」に焦点をあてた指導や、母語話者のみをモデルとするのではなく多様な英語に触れることを重視する考えが強化されていると推察される。2024 年度は例外的な指導体制だったことから、低学年の英語活動担当教師、学級担任など、日々の授業で関わる機会が多い小中学校の ALT 以外の教師とも相互に学び合う機会をどのように維持するか、そして、今後「ALT は母語話者であるべき」という、授業者自身とは異なる価値観に多く触れた場合に、その考えをどのように解釈し、実践を行っていくかについて、引き続き検討していきたい。

6. 謝辞

研究協力校の先生方と児童の皆様に、心より御礼申し上げます。なお、本研究の実地調査実施にあたっては、一部、公益財団法人中央教育研究所令和 6 年度教科書研究奨励金の助成を受けています。ここに感謝申し上げます。

引用文献

秋田喜代美（1997）「熟練教師に学ぶ、発達を支える要因教師の生涯発達―つまづきと成長Ⅲ」『児童心理』51 (8), 117-125.

鈴木洋介・庄司一子（2022）「教育実践の省察による教師の成長・発達概念の検討：教師の成長・発達モデルの歴史的背景と今後の展望」『共生教育学研究』9, 75-87.

和田あずさ・ナットチー直子（2025）「英語に堪能な若手小学校教師の英語音声指導観の変容過程③―多様性と明瞭性をめぐる葛藤に着目して―」『日本国際教養学会誌』11, 102-116.